

『延喜式』の「六月晦大祓、十二月此准」に白人胡久美（みづかおほほろみ）のことが出ます。ですが、漢字文献には良く解らないような記事しかありません。

シラヒト・ククミの真相を、かいつまんで説明しておきましょう。

もともと、タカミムスビの子孫にアメカカミカミと言う優れたお方がおいででした。アメカカミカミはツクシ（九州）を足して良政をもたらしました。その子のアメヨロツカミはソアサ（四国）を足して良政を実現しました。そして、アワナギさんとサクナギさんをもつけます。アワナギさんはネのシラヤマからチタル（山陰道諸国）までを足します。そしてタカヒト（のちのイサナギ）とクラキネをもつけました。

タカヒトさんが7代アマカミに即位なさいます。

クラキネさんはアワナギさんのお世継ぎとして、ネのクニ・サホコ・チタルを治める事になりました。クラキネさんはシラヒトをもつけました。クラキネさんは後妻にサシミメを迎えます。その朋輩（血縁があったかも）のククミを取り立てて、サホコ・チタルを分国してマスヒト（いわば準国司）に任じました。ところが、マスヒトになったククミがマツリヒト（政）はサボるし無茶苦茶をやるのでした。

クラキネさんの逝去の後に、シラヒトがサシミメを妻としました。また、その子のクラコヒメも犯したのです。噂になってくると、シラヒトはサシミメ母娘を立山に押し込めます。このゆかりが立山の姥堂です。ゆらに噂が立つとくると、サシミメ母娘をククミのもとに追いやります。ククミは、サシミメ母娘を妻としました。

このグチャグチャを收拾したのちに、ソサノヲがサホコ（イッモ・出雲）のクニカミ（のちのソノ國司）に任じられる事になりました。

333アヤ、カミアガメ アヤミタス アヤ

(10代崇神天皇の前半)

³³³⁻¹ アススの621年のキナエ(21)のハル(春)の1月のネシエ(19)が1日、^{元年}キシエ(31)の13日の事でした。

井ノエのミロは、アマツヒツキ(天皇位)を受け継がれまして、ミマキイリヒコのアマツキミ(崇神天皇)と名乗られます。ミクサタカラの授受の使いも、アメタメシで、アマミマロ(ニニキネ)からの伝統の通りにおこなわれました。翌日には、儀式の飾りをタミ(一般国民)に公開なさいます。

³³³⁻³ ハハ(生母)のイキシロメ(イカシロメ)さまをミウエキサキとして、尊びます。通常の如くです。11年(年齢)は121歳でした。

ミツルサヒ

⑤ イキシロメさまの御長寿のこと。アスス689年に189歳の記事があります。35-4

また、オオハハ(祖母)のウツシロメさんは162歳になられておられて、オオンキサキとして尊びます。

³³³⁻³ 初年のキサラキ(2月)の1日がサウト(48)で、ミシエ(3)の16日にキサキを定められます。オオエロの娘を召してミマキヒメとなさいました。筆頭のおキサキさんです。ミマキヒメは11歳でした。キのアラカトへの娘のトオツアヒ・メクハシヒメはオオスケキサキです。アフミの娘のヤサカ・フリイロネヒメは、カリ(仮り)のスケキサキです。また、オハリの娘のオオアマ・ウチヒメは、ナカハシ(後の長橋)のオシテ(ヲシテ)を回る守の役です。

³³³⁻⁶ さて、この以前の事で、ミロやエメミロの誕生の事がありました。メクハシヒメは、トヨスキヒメをお産みになっていました。オオアマヒメはヌナキヒメをお産みになっていました。また、メクハシヒメは、ヤマトヒコをお産みになっていました。ヤマトヒコのイムナ(実名)は井ノキネです。ヤサカ・フリイロネヒメはヤサカイリヒコ(オオキネ)をお産みになりました。この故に、ヤサカ・フリイロネヒメは、カリスケキサキに上らせられたのでした。

³³³⁻⁷ 3年(アスス623年)のナツキ(9月)にシギのミツカキ(桜井市金屋)にニイミヤコ(新皇居)を開かれました。

³³³⁻⁷ 4年(アスス624年)のメ(10月)スエミカ(23日)にミマキイリヒコ(崇神天皇)はミコトノリを発させられました。

『ミツヤ(先祖のアマカミ)の授け下さいました、ミクサモノ(ミクサタカラ・三種の神器)のことをよく考えるのです。それは、すなわち、初代のクニトコタチさんからカンヲシテ(ト)のヲシテを始めとする文書(が代々引き継がれてきました。アマテルカミは、ヤタカガミをお作りになりました。また、オオクニタマ(クシヒコ)はヤエカキのツルギを守ってくれています。』

常にマツリてこそ、ミとカミと(身体と精神と)距離をおくことなく過ごせます。「トのヲシエ(ヲシテ)の通る姿も、ミクサタカラのウツツ(神器)と共に澄みきります。』(シミ・ト、ホ21-43)

このため、畏れを抱へるのです。それは今の現状で、十全のマツリをおこなえているのだらうかと言ふ事です。このため、カガミのアマテルカミと、ツルギのオオクニタマ(クシヒ

ミマキイリヒロのキミ(十代、崇神天皇)は、「これで、栄える事が出来る」と安心なさいまして楽しみたまうのでした。

そこで、イキシコラに占わせました、「まじじ、良い」の結果が出ました。さらに、他のカミをもって「フトマリ」で占わせてみますと「悪い」「の結果が出ました。

7年(アススの27年)のメツキ(10月)の1日に、カミ祭りをおこないます。イキシコラ(物部氏)はヤンヒラカ(80枚のお祭りの為のお皿)を作ります。そして、オオタネコをオオミワのカミ(大三輪神社)のイワヒメシ(祭主)としまして、ナガオイチはオオクニタマ(大和神社)のイワヒメシに定めて、広く天下に知らせました。これより、カミを崇(あが)める事をもっぱらとして、カミナフミナス カン入【詳細は未詳】をして、ヤンヨロカミを祭らせるのでした。【ナガオイチは、シイネツヒの子孫か? 詳細は未詳】

11の結果、トヤミ(疫病)も直り、ソロ(水田の作物、畑の作物)も実って、タミも豊かさを取り戻したのでした。

8年(アススの28年)ウ(ウツキ、4月)4日に、タカハシ・イクヒはミキ(お酒)を作り、オオミワカミに奉りました。そのミキの味は美味(うま)かったのでした。シハス(12月)8日になりまして、また、オオミワのカミを祭らせて、ミマキイリヒロさんもミロキして親(みず)からお祭りのなごります。イクヒの酒をお供えしましてミアエ(11)馳走)をします。11の時、「ミマキイリヒロ」はおウタ(御製)をお詠みになりました。

このみきは わがみきならす
やまとなる おほものぬしの
かみのみき いくひさひくる
すきはいくひや

ミアエを終えて、トミ達が歌うのでした。

うまさけや みわみわのこの
あさにも いててゆかなん
みわのこのとお(を)

時に、ミマキイリヒロさんは、カエウタ(返しウタ)をお詠みになります。

うまさけに みわみわのこの
あさにも おしきらかねよ
みわのこのとお(を)

トのトを押して開きて、帰りますのでした。

9年(アススの29年)のヤコヒ(3月)のモチ(望月)に、ミマキイリヒロ(崇神天皇)さんは夢を見ました。夢に、カミがツゲ(告げ)るのでした。

『カシキ(赤・白・黄色)のホコを立ててカミを祭れ。』

ウタ(宇陀)のスミサカ(宇陀市榛原区萩原、墨坂神社か?)も、オオサカ【現在地、未詳】も、カワセサカ(彦根市、河瀬神社か?)、『延喜式』での川桁神社)も、ミオ(安曇川平野のミオカミ、三尾神社・三生重神社・水尾神社などか?)も、残りなく祭るべし。

これは、ツミヒト(罪人)のシイ(シイ、強い事)を、何とか止(とど)める事になります。さらには、アヤミを為してしまふ真の原因にも、対処が必要です』

ウ(ウツキ、4月)のスエフカ(22日)に、ヲトミ(中心のトミ・カガミのトミ)のヲカシマ(カシマ)と、タタネコに、タマカエシノリ(迷えるタマを、アモトに還す祭り)

を祭らせるのでした。此れに拠りて、アカルキ（天下が晴れた）になりましたのでした。

ミツルナヒ

③ ヲヲカシマさんは33歳。タタネコさんは20歳。

33-36 ソホ（10年、アスス630年）ネヤトのフツキ（7月）のスエヨカ（24日）に、ミトノリを発せられました。

『タミのイヤミ（疫病）をタス（直し癒す）ラシエ（教え）は、カミマツリによって、実現を得ましたのでした。』

ようやく、ヲエ（病気など災い）は去りましたが、トオツクニ（遠国）にはアラト（荒んだ人心）にの事でノリをまだ平（む）け得ないのです。この故に、ヨモ（四方）にラシ（教え人・勅使）を遣わして、ノリを教えて平穩を齎したいのです。』

33-37 ナツキ（9月）9日に、4人のラシ（勅使）にラシテ（ラシテの御旗）を賜ります。

オオヒコは、ロシ（越前・越中・越後）のラシです。（8代クニクル孝元天皇のミコ、ミマキメの父）

タケナガワケは、ホツマ（関東地方）のラシです。（オオヒコの弟、ミマキメの兄）
キヒヒコは、ツサ（西南方面）のラシです。（クシミカタマの子孫）

タニハチヌシ（タニハ・ミチヌシ）は、タニハ（丹波）のラシです。（9代フタヒコ開化天皇のミコ、ウツマスの兄）

33-38 ミマキイロヒコ（崇神天皇）さんは、ミトノリをしておっしゃいます。

『ラシエを受けないで反抗をする人があれば、ホコロハセ（亡ぼせ）』

と、ラシテ（ラシテの御旗）をそれぞれ4人に賜るのでした。そして、それぞれが、イクサ立ち（戦闘支度での出発）をします。

33-39 さて、オオヒコは、9月のキチ（望月）に、ナラサカに至りました。すると、一人のオトメ（少女）がウタを歌って聞かせるのでした。

みよみまき いのひにあはや

おのがそゑ ぬすみいせん

しのじとお（を） いゆきたがひぬ

まえじよみ いゆきたがひて

うかがわく しのじよみまき

いのひにあわや

33-41 このウタを聞いたオオヒコは、アヤシク（不思議に思って）感じて、戻って、オトメに聞きました。

オトメは、います。

『われは、ウタを歌つのみ』

と、言うつと消え失せてしまつのでした。

オオヒコは、胸騒ぎを覚えて、ミヤコのミツカキのミヤに立ち返るいふてします。